

巻 頭 言

社会医療法人きつこう会 理事長 多根 一之

2020年は、新型コロナウイルス（COVID-19）感染症拡大により世界中が猛威にさらされ、後世まで語り継がれるであろう大変な1年でした。当然私たちきつこう会（KHS[®]）にとりましても大きな試練の年となりました。感染症拡大当初、総合病院では新型コロナウイルス感染症以外の一般診療・救急医療を守るためあえて新型コロナ患者を受け入れずに運営を行っていました。しかしながら時の経過とともに感染拡大状況はますます深刻化し、感染症軽症者等の宿泊療養施設へのスタッフ派遣、発熱外来の開設、そして9月には感染拡大第三波襲来を見据え8階のHCU病棟の6床を新型コロナ専用病床として大阪府への提供を開始。また地域の診療所からのPCR検査依頼に対応すべく地域外来・検査センターを開設し、同時期に人間ドックの多根クリニックでの無症状者のPCR検査も開始させました。このようにKHS[®]では状況に合わせて新型コロナウイルスへの対応を推進したわけですが、その裏側ではクラスターこそ発生しませんでした。職員・患者様・利用者様の感染散発は避けられない現実がありました。このように医療・介護の現場は常に感染拡大のリスクとの隣合わせ状態が続いていますが、私たちKHS[®]がサービスの質を落とすことなく医療介護サービスを提供し続けられている現状は、職員1人1人の危機意識の高さ、医療・介護従事者としての使命感の強さが証明されたものと理解し、皆さんの不断の努力には頭の下がる思いでいます。今もなお総合病院のICT・救急部・看護部・コメディカル・受付など直接新型コロナウイルス対応に当たる部門・職員はもちろん、それ以外の全病院・施設・事業所の全スタッフが一丸となり一切の隙を見せずに対応し続けています。これは職員の皆さんの元々の資質はもちろん、加えまして創立70年の伝統で培ってきた、危急時にこそより団結力が強まり底力を発揮する「タネイズム」の成果であると確信しました。引き続き気を緩めることなく一致団結しこの苦境を乗り越え、未だ先行きは不透明ですがコロナ禍の収束を迎えたいものです。

さて多根総合病院医学雑誌は今回で記念すべき第10巻を迎えました。日常勤務で繁忙な中、論文を作成することは大変な労力と時間を費やします。しかし論文としてまとめあげること、それまでとは異なった新たな見地の発見・気づきにつながります。職種を問わず、ベテラン・中堅職員の日頃の成果・業績の発表の場として、また若手の職員の論文発表の登竜門として本誌が役立ち、また全職員の知識交流の場としてタネイズム醸成の一助となることで、法人が一層の高みに到達することを願って止みません。

2020年12月29日 記